

# 西 *Festival* 浅井の祭

## 須賀神社春の例祭飾

■四月二〜四日

須賀神社春の例祭には、三基の神輿が渡御される。もともと須賀神社は、保良神社、小林神社、赤崎神社の三社が合祀されたもので、それぞれの神輿が神輿堂のなかに安置されている。

本祭の三日の午後。雅楽の響きが聞こえてくると、いよいよ神輿が姿を見せるのも近い。宮司のお威いがすみ、掛け声がかかると、神輿を早く担ぎ出そうと、かき手の若者たちは我先にとお堂に突進する。

村を一巡した神輿が御供所に戻り、お供え、舞の奉納の後には、御幣を回して地をはく仕種が見られる。これは「幣祭」と呼ばれる珍しい所作だ。このあと見られるのが「簀巻き」とよばれるもの。若者らが、土地の名士らを手あたり次第むしろに巻いて地面に放り出すという、いささか荒っぽくも、なんとも滑稽な余興だ。



## ちゃんちゃんこ踊り

■八月十六日

京都と北陸を結ぶ道、また若狭に入ってくる大陸の文化をも伝える道として重要な役割を果たした塩津海道には、さまざまな地方の文化が往来した。

塩津海道沿いの集落、集福寺に伝わる通称ちゃんちゃんこ踊りには、雅びやかな花笠踊り、大名行列を見るような奴振り、太鼓や鉦を打ち鳴らす雨乞い踊りなど、二十ほどの踊りが見られる。「ちゃんちゃんこ」というのは、その鳴物の音からつけられた名らしい。

鉄棒、薙刀、毛槍などに混じり、表紙のような衣装をつけた中学生くらいの子たちも行列に加わる。浴衣姿の少女たちのかぶった花笠の周りには色鮮やかな布が垂れ、祭りの雰囲気がいっそうあでやかに盛り上げる。五十人ほどの行列は、集落の大門から下塩津神社までを、途中で踊りを披露しながら練り歩く。

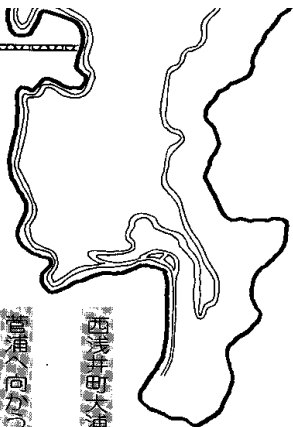


## 水運まつり

■八月初旬

北陸から塩津海道を通って運ばれてきた物資は、塩津や大浦の港から大津に向けて輸送された。その運搬船として、昭和三十年代まで活躍していたのが丸子船。

この丸子船の歴史を、町づくりの活力源として行われる水運まつりでは、毎年趣向をこらした催しが行われている。



# ぶらりり 菑浦

菑浦半町大浦から約二十分ほど。

菑浦への道の風景は。

大浦の半町大浦の半町が、いかに自然豊かなか。

菑浦半町大浦の半町が、いかに自然豊かなか。

菑浦半町大浦の半町が、いかに自然豊かなか。

菑浦半町大浦の半町が、いかに自然豊かなか。

菑浦半町大浦の半町が、いかに自然豊かなか。

菑浦半町大浦の半町が、いかに自然豊かなか。

菑浦半町大浦の半町が、いかに自然豊かなか。



### 尾上の漁師が土器を網にひっつけた

びわ湖の底に何千年も前の土器が沈んでいる。場所は、葛籠尾崎の沖合だ。

「もぐって見に行きましょうか」と、長浜みーなのスタッフ薫ちゃんが言った。「七十メートルくらいの深いところにあるんですよ。ちょっとむりやね」

びわ湖のことなら何でも知っている中年スタッフの西山昇は、自信に満ちて答えた。「葛籠尾崎の沖合で、どの辺なん？」

「葛籠尾崎の先っぽから、東へ七百メートルくらいの沖合やね」

「そんな、なんで分かったん？」

「大正十三年、尾上の漁師さんが湖底の土器を網にひっつけた。上げてみたら、これはエラ古いもんですよ、と大騒ぎになったわけや」「だれが湖に沈めたん？」

「それはやね、エート、エート……、昔の

湖北の人やね」

何でも知っているはずの西山の調子が、早くもあやしくなってきた。

「なんで沖合に沈めたん？」

「それはやね、エート、エート……」

西山は、うろたえながら新聞記事の切り抜きを取り出した。

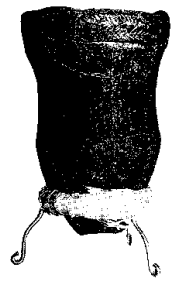
### 尾上港からべんてんに乗り込む

「これに行かへん？」

西山が見せたのは、「水とロマンの祭典」という湖北町主催のイベントの記事だった。

船上で「葛籠尾崎湖底遺跡の謎」というテーマの講演を聞く。しかも、水中ビデオカメラからの湖底の様子を、テレビで観察できるというのだ。

疑問を解明するため、イベントへの参加はすぐに決まった。ときは、七月中旬の日曜日。二人は、尾上港に係留された琵琶湖汽船の「べんてん」に乗り込んだ。



葛籠尾崎湖底遺跡資料室(尾上公民館内)に展示される縄土器

出港してまもなく船内を見回すと、百三十人の定員に近い参加者だ。船は十分あまりで葛籠尾崎の沖合に到着した。錨を降ろしてしばらくすると、名古屋女子大学の丸山童平先生の講演が始まった。

この船上シンポジウムは、今回が十回目だ。そう、丸山先生のお話も今回は基本からもう一度、ということになった。あやしい知識の二人にとって好都合だ。丸山先生のお話は、葛籠尾崎湖底遺跡の七不思議から始まった。

### 世にも不思議な湖底遺跡の謎とは

① 土器は、水深七十メートルから百メートルという非常に深いところにある。湖底遺跡といっても、普通は水深数メートル以下の浅瀬ばかりなのだが。

② 土器は、完成品の状態で残っていて、壊れていない。それも縄文時代から古墳時代、奈良時代のもまで。土器には湖成鉄という鉄分が、古い時代のものには厚く、新しい時代のものには薄く付着している。つまり、一度に沈んだものではないということ。

# 葛籠尾崎湖底遺跡の 不思議にせまる

③ ほとんど土器ばかりである。石器は出ることは出るが非常に少ない。木器はまったく出ない。

④ ほとんどの土器が湖底で上を向いている。つまり自然に置いた正しい姿勢で沈んでいるのだ。普通は、パイと横を向いているヤツが少しはあるはずなのだが。

⑤ 変わった形の土器が圧倒的に多い。つまり、古代の生活で普通に使われた土器ではなくて、祭祀に使われたようなものが多い。

⑥ 土器の年代の幅から比較して、土器の数が少なすぎる。現在発見されているのは、二百個ほど。年に一個ずつ沈めたとしても、七千から八千個くらいにはなるはずだが。遺構がない。普通、遺跡には住居跡があったり、貝塚があったりするものだが、ここ

には土器だけしか出ない。

### だれが、なんで土器を沈めたんやろ

「だれが沈めたんやろ？なんで沈めたんやろ？」

という疑問は、この七不思議を聞いて深まるばかりだ。これに対しては、いろんな説が考えられている。

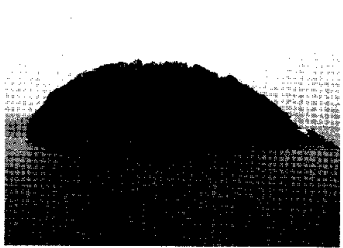
まずは「地すべり説」。

葛籠尾崎の先端は、山がとても急で、そのままびわ湖に切れ落ち、湖のなかも湖底までV字の地形になっている。だから、山の中腹にあった土器が、地すべりで湖底に沈んだのではないかという。

次は「陥没説」。葛籠尾崎の東側が、いつの時代かに地盤沈下を起こして、土器もいっしょに沈んでしまったのではないかと。でも、「地すべり説」も「陥没説」も、土器が完全な形で残りそうにはない。

続いて「難破説」。びわ湖の荒波で船が難破して、土器が沈んでしまったのではないかと。でもこの説では、いろんな時代の土器があるというのが説明できない。

「船上投下説」はかなり有力だ。竹生島は、古代から神の住む島だった。なんらかの祭祀の一環として、船上から土器が落とされたの



葛籠尾崎の先端



ビデオカメラを持って湖底に潜るダイバー

ではないかという。でも、それにしては数が少なすぎる。

ほかにも「水中保管説」「水中葬送説」「水中祭祀説」など、いろんな説が出されている。謎は深まるばかりだ。

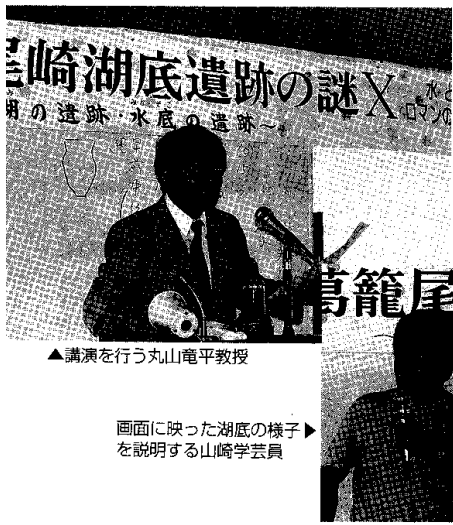
丸山先生の講演が終わると、二人のダイバーがビデオカメラを持って湖底に潜った。船上のテレビに、その映像が映しだされる。ダイバーの手と比べてみると、土器の大きさがよくわかる。

「フーム、ほんまに上を向いてるな」「小さくて実用品ではないな」

「全然壊れてないな」

いろんな事実は分かったのだが、来る前に薫ちゃんが発した疑問は、まったく解明されていない。西山と薫ちゃんは、頭にハテナマークをいくつも増やして、湖底遺跡を後にしたのだった。

この七不思議を解明しようという読者は、ぜひ来年の『水とロマンの祭典』に参加して、独自の説を打ち立ててほしい。



▲講演を行う丸山童平教授

画面に映った湖底の様子を説明する山崎学芸員

